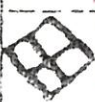


魂ナルベク家庭トシテハ戸主ニシテ國家トシテハ國王

ニシテ人類トシテハ惠保婆閻魔天神命

・・等ニシテ「比・火・日・靈・魂・一・

氷・緋・零・・田・品・・・・・

・・・・・・・・・等ニシテ

日本民族ハ「みち」ト教ヘラレタル天津神國津神

人類建国の原則なりとなす。是くの如き、

人類建国の原則は、宇宙成立の原則にして、万邦の拠らざるべからざる神則なり。

古往今来東西大小の国家は、その成立の経路を異にし、国躰また同じからず。然りと雖、窮極に於ては、此の原則に拠りて、はじめて安定し、此の原則に背きては、悉皆亡滅したるなり。

我等の古典は、此の理を教ふること懇切丁寧委曲を尽し、

我等の神道、此の祭事を伝へて、天壤無窮の実を現はしたるものなり。然るに、不幸にして、中古以来此の学衰へ、此の行顧られず、上下共に夷狄の邪説、蛮貊の魔行に溺れて、興亡常無く、浮沈測られざるに到れり。冀くば、旧来の陋習邪俗と掃蕩して、^{ヒノカミ}⊕神御垂範の神理に則り、経と緯と、平面と立躰との、不一不二なる○を掲げて、神聖国躰と成さざるべからず。

神聖国躰は、ひとり我等の古典が伝へたるのみにあらずして、全人類が建国の標識基準となしたるなり。日本国家が神と讃へ、^{ミコト}尊と仰ぎたるも、支那に於て、聖と呼び、十と描き、日と教へ光と言ひしものも、中央亞細亞より以西の諸国に於て、^{ヒノカミ}⊕と作り、^{ヒノカミ}⊙と描き、十と数へ、十字架と讃美したるものも、乃至、天国、浄土、樂園、天池、中国等と、各国各地方に伝承するところのものも、皆共に、此の^{ヒノカミ}⊙を標識基準と仰げるなり。

然るにもかかはらず、人類は此の^{ヒノカミ}⊙を忘れて、雑糅混淆の魔身と化し、紛紛擾擾、鬭争破壊を事として、寧日無き悲嘆を繰返しつつあるなり。

今や、全世界人類は、之等の魔身邪想を調伏し、摧破し、教化誘導する憲法を制定せざるべからざる時とは成れり。

祖神と主神

多田山公遺稿

「惠保婆、我が主に宣り給は、我れ今汝を生みたり、總べの國をば汝に与へん。」

此の本文に依りて、惠保婆とは祖神にして、我が主たる基督を生み給ひし靈なること明なり「神の靈水の面を蔽へり。」

云へる靈は即、此の靈なる惠休婆にして零なり。

故に極大極小にして「之れを開けば六合を蔽ひ、之れを閉づれば蜜に蔵るる」ものにして、「物在り、天地に先ちて存す」と云へる物なり。

「天地初判、一物在於虚中」と云へる物にして、虚にして、中外にあらず、有無にあらずなり。

一にあらず二にあらず、三四五等にあらずるなれば、零にして、〇にして、火にして、空虚なりと三言の教入来たりしところなり。

故に物ならざるの物なり、神ならざるの神なり、人無きの人なり、神無きの神なり、人ならざるの人なりとも云へるなり。之れを天御中主大御神（あまのみなかぬしのおほみかみ）とも天照大御神（あまてらすおほみかみ）とも天常立神（あめのとこたちのかみ）とも教へられたれども、日本古典には其の然ることを説示せず。

僅に別天神・獨化之神・獨神隱身・一神・等の名を記したるのみ。

故に之れを知らんと欲せば、唯一專念に神名を奉称して神命を仰ぎ、神界眞理の大道に立ちて體得せざるべからず。

唯一專念神名奉称
神人來示 八神殿

神ならざる神とは〇にして零なる極大極小なれば、總べてにして、計算すること能はざる無なり。

「莫靈圖」と古典に載せたる圓なり。

此の圓は「マト」と訓みて「的」「基準」「稱讃」等の文字言語を充満するものと傳べく、「高

圓（たかまと）」「的形（まとかた）」等の語と等しくして、「閻魔天（やゝま）」「摩耶（まや）」「聖母（まりや）」等と同義なり。之れを「親（おや）」とも「祖（おや）」とも「天神（あまつかみ）」とも「天祖（あめのみおや）」とも傳へたる「祖神（みおやのかみ）」なりとなす。

祖神は國を築き神をも生み給ふなれば、神の外なる神なりとは云へるなり。

「神は宇宙を造り給ふ」とも「宇宙の外なる神」とも云へるは此の祖神なれば「マト」にして「マトカタ」・「タカマト」・「サヤギナキヒ」・「アメノミオヤ」・「オヤ」・「アマツカミ」・「マリヤ」・「ヤシマ」・「マヤ」・「アメノトコタチノカミ」・「アメノミナカヌシノカミ」・「アマテラススメオホミカミ」・「エホバ」等にして、支那人が「神」と描きたるところなり。

「ミート」なり「ミチ」なり「イノチ」にして「命」・「天命」・「運」・「大道」等と書く。此の三言なれば「尊」の一

字を以つて「ミコト」と訓まし
たるなり。

従つて、此の「尊」とは神な
らざるの神なり。

然れども、「命」とは異にし
て、○ならざるの□なり。

□なりとは「クニ」にして怪
奇の存在なりとの義なり。

相（すがた）無くして相を現
したりとの義なり。

○は相無く音無きを示し、□
は相無く音無きものの相を示す
ことを教へたるなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリ
ヤモモチチミテリ。

以上

昭和十一年十月三日



○も□も共に祖神なる火なれ
ども、○は圓にして□は方なり。
方とは「スガタ」なれば「形
無きの形なり。」「法則無きの法
則なり。」「無きにはあらざるな
り。」「との義なり。

無きにはあらざるものの結び
結ひたれば「ヒカリ」なりき。

「神、光あれと云ひ給ひけれ

ば光有りき」「二二へる」「○」
なる「ヒ」「タリ」「モ」「チ」「ミ」「テ」「リ」な

り。

「日神（ひのかみ）」なり。
即□なるなり。

一にして二にして三にして四
にして五なる「ヒフミヨイ」に
して「神代（かみよ）」にして
「神代五代（かみよいつよ）」に
して「カミカカリ」なり。

「神二つの光を與へ給ふ」と
あるは二□にして水（みづ）に
して「天なる水と地なる水とに
別ち給ふ」と云へる天地の日な
り。

「天譲日天狹霧國禪日国狹霧
尊」と傳へたる神なり。

一神にして二神にして「ヒ」
にして「ヒト」にして「カミ」
にして「アメツチミスマルミタ

マノカミ」にして「アメツチノ
カミ」にして「アメツチノカミ
ワ」にして「二柱御祖神（ふた
はしらみおやのかみ）」にして、

「天御柱國御柱」にして「八尋
殿（やひろどの）」にして「八神

（やはしら）」にして「伊邪那岐
命伊邪那美命二柱神」にてまし
ますなり。

之れを「アマノヲホコ」とも
「シホツニノヲホコ」とも「シホ

コヲロコヲロ」とも「美斗能麻
具波比」とも教へたまへる産神
にして、「高皇産靈神」にして

「神皇産靈神」にして「神魂高
魂生魂足魂玉留魂大宮女御饌津
神辭代主」にして「大直靈神」
にてましますなれば、「ヤタノ

カガミ・ムラクモノカムツルギ
・ヤサカニノマガタマ」にして

「オキツカガミヘツカガミヤツ
カノツルギクミタマタルミタ

ママカリカヘルミタマタルミタ
マチカヘシノタマヲロチノヒレ
ハチノヒレクサクサノモノノヒ

レ」なる「二ギハヤヒノミコト」
にして「一二三四五六七八九十

百千萬」にして「八百萬魂神」
にてましますなり。

以上

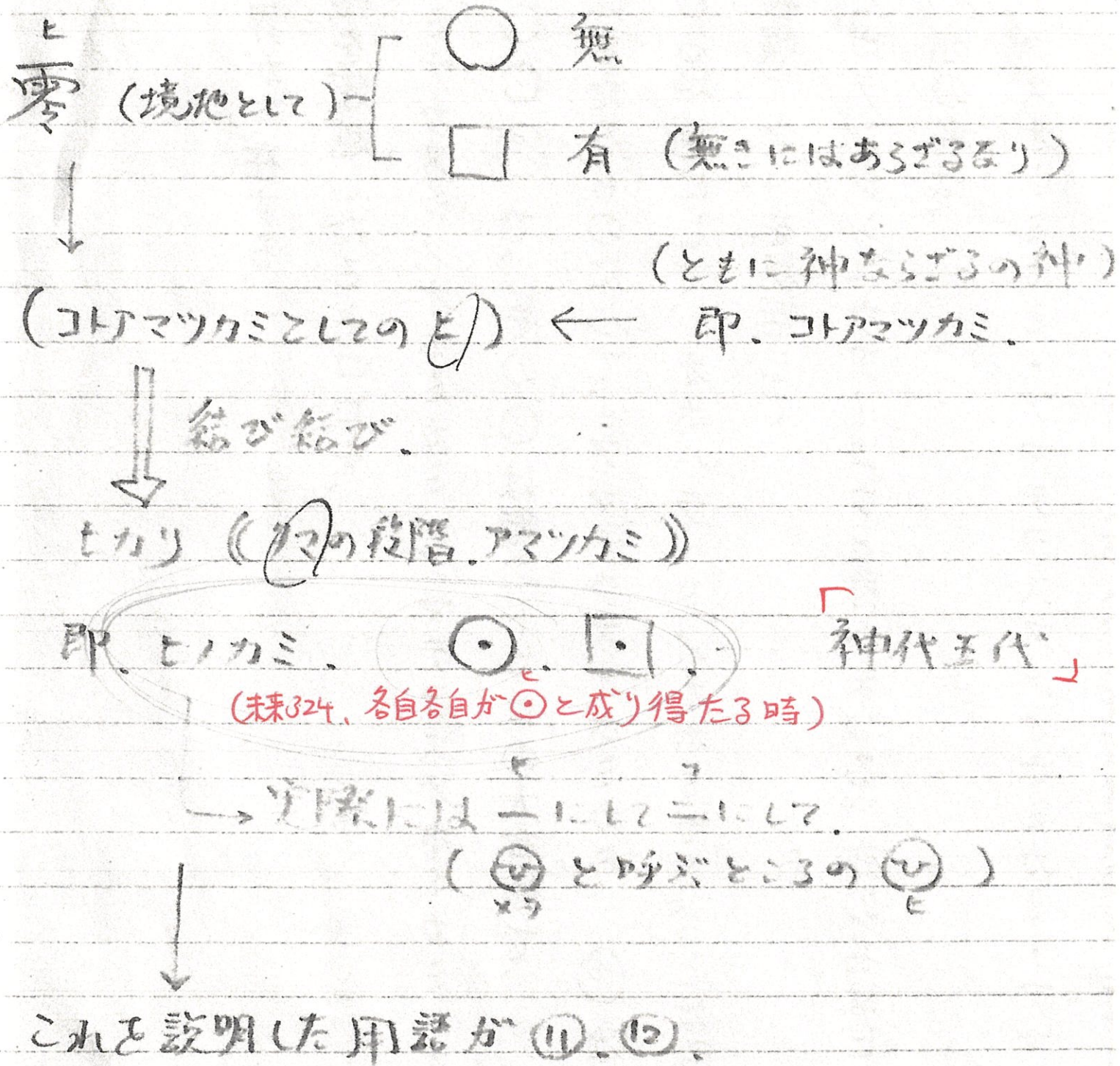
昭和十一年十月三日夜半

之れを二柱御祖神の神挂と称
して生産の祕事なり。

生産は人の最快とするところ
にして、人を産むを其の極とな
すなり。

二柱みおやのかみのたてまき
しつばのいしあきふくしとてこころ
をなみぞうとてこころをなみぞう

祖神と主神 2頁目の説明



解 (神代七代…コアマツカミの領域まで及んだ、作用力の表現、○)
 親 (神代五代…アマツカミの領域における、実体としての表現、●)

の勅命のままに猛然踊躍してお降り遊ばされたのである。

往くか返るか来るか去るか。窮め来れば唯は一点である。之を古老は「高天原」だと教へさせられた。斯くして此処に此のまま高天原は成り成る。

「如此久依^{左志奉志}四方之國中斗大倭日高見之國^{平安國止定奉}下津磐根^{爾宮柱太敷立高天原}爾千木高知^{天皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉}天之御蔭日之御蔭止隱坐^{平安國止平氣久所知食武}」

之を第三段とする。第一段では中心としての皇御孫之命とその外郎たる八百万神との關係を教へて先其の中心の確立と外郎の統一とを命ぜられ第二段では外郎の分裂と統一と其の結果とを明にせられ「天之磐座」のそのまゝなる神國淨地を人間世界に築き成したる曉を第三段に詳述せられたのである。

その神國淨地は「大倭日高見之國」と呼ばれるので「四方之國」を外郎として緯^{スミ}の在るかぎりと「下津磐根」「高天原」と下の下までも上の上までも経^{タテ}としての在るかぎりとを「美頭乃御舍」即「天之御蔭日之御蔭」としてその中心に隱り^{ニモ}「隱身天之御中主神」のそのままに上天下地四維八隅一切合切を安らけく平けく統治統率せさせ給ふ。

それは人間身として拝しまつることを得る御玉躰が高天原にての皇親神漏岐神漏美命にたまひし隱身の神としての天之御中主神にたまひますが故に近く図解を借りて説明すれば○なる球躰で⊕である。之を古聖は十字架と教へられた。「十字架上一點之火」は時空を超えて時空を現はしつつ過去も如是将来も如是現在も如是經に緯に際涯無き日なる光である。之を「日神」^{ヒノカミ}とも「⊕」^{ヒノカミ}とも「・・・○」^{ヒノカミ}とも稱へて来たのは人間身の機能相應に判り易からしめた神の御意である。

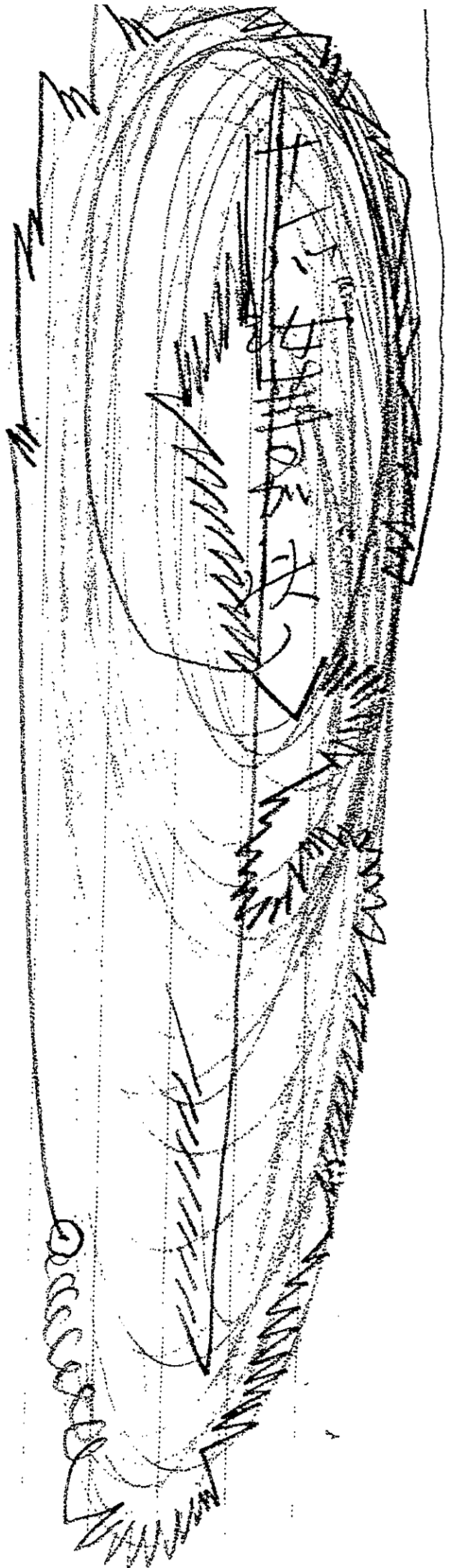
日神^{ヒノカミ}によつて完成された宇宙全体を表現する時^{トキ}・・・○と描く。(262頁)

も、火とも、水とも、エホバとも、マヤとも、マリヤとも、アバイロンとも、ヤーマとも、母とも、父とも、天とも、地とも、無とも、有とも、無一物とも、物とも、理とも、點とも、線とも、面とも、零とも、一とも、二とも、三とも、五とも、十とも稱するので、一であるところの一切で、物無きの境地である。物は無いが、境地としての零界を保有するのである。で、之は、無の有と呼びて、位置のみ存るのである。

位置のみだと云ふのは、未、物を成さざるので、物と成るべき資料の存るのみである。其の資料に依つて、箇體を築くには、其の種子が無ければならぬ。其の種子を「し」と呼ぶのである。「し」とは、死であり、知であり、治であり、主であり、人であり、統治で、統率で、我である。此の種子は、其の初、唯一點としての位置を占めただけであるから、未、量に上らないのであるが、其の種子の萌騰出づる時、葦牙の如くであるとして、之を、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へて、「ほ」と呼ぶのである。訶備とは、穎の複數語で、萌えに萌えたる穗で、△である。△と圖示するのは、箇體發生の上から、等しく、箇體たる人類の便宜なので、○と晝くに等しいのである。故に、之を擴大し、説明を加へて、令と描くも、※とするも、或は、⊗、又は、⊙、又或は、⊕と描きまつるも、共に等しく、△を種子とし、△を原型とし、○を標識基準として、生れ出でたる相である。之を言ひ換へると、死と呼ぶところの零から、其の零を資料として、此の生を生ずるので、之を「しほ」と稱し、鹽とも、潮とも、汐とも書き、此の妙用を主る主體を鹽椎神と稱へまつり、其の創造せらるる状態を形容しては、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へ、内容を解説しては、「二柱祖神」「修理固成天沼矛」「天浮橋」「鹽固袁呂固袁呂」「淤能碁呂嶋」「天御柱」「八尋殿」「美斗能麻具波比」「布斗麻邇」「大八嶋國」と傳へたのである。

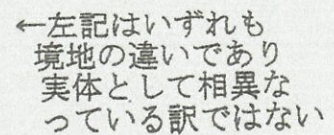
それは、大虚空に、一點を認めたる時、其の一點が、旋廻し統一して、箇體たる宇宙を築く。其の旋廻し統一

1-2-3-4-5-6-7-8-9-10-11-12-13-14-15-16-17-18-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-32-33-34-35-36-37-38-39-40-41-42-43-44-45-46-47-48-49-50-51-52-53-54-55-56-57-58-59-60-61-62-63-64-65-66-67-68-69-70-71-72-73-74-75-76-77-78-79-80-81-82-83-84-85-86-87-88-89-90-91-92-93-94-95-96-97-98-99-100



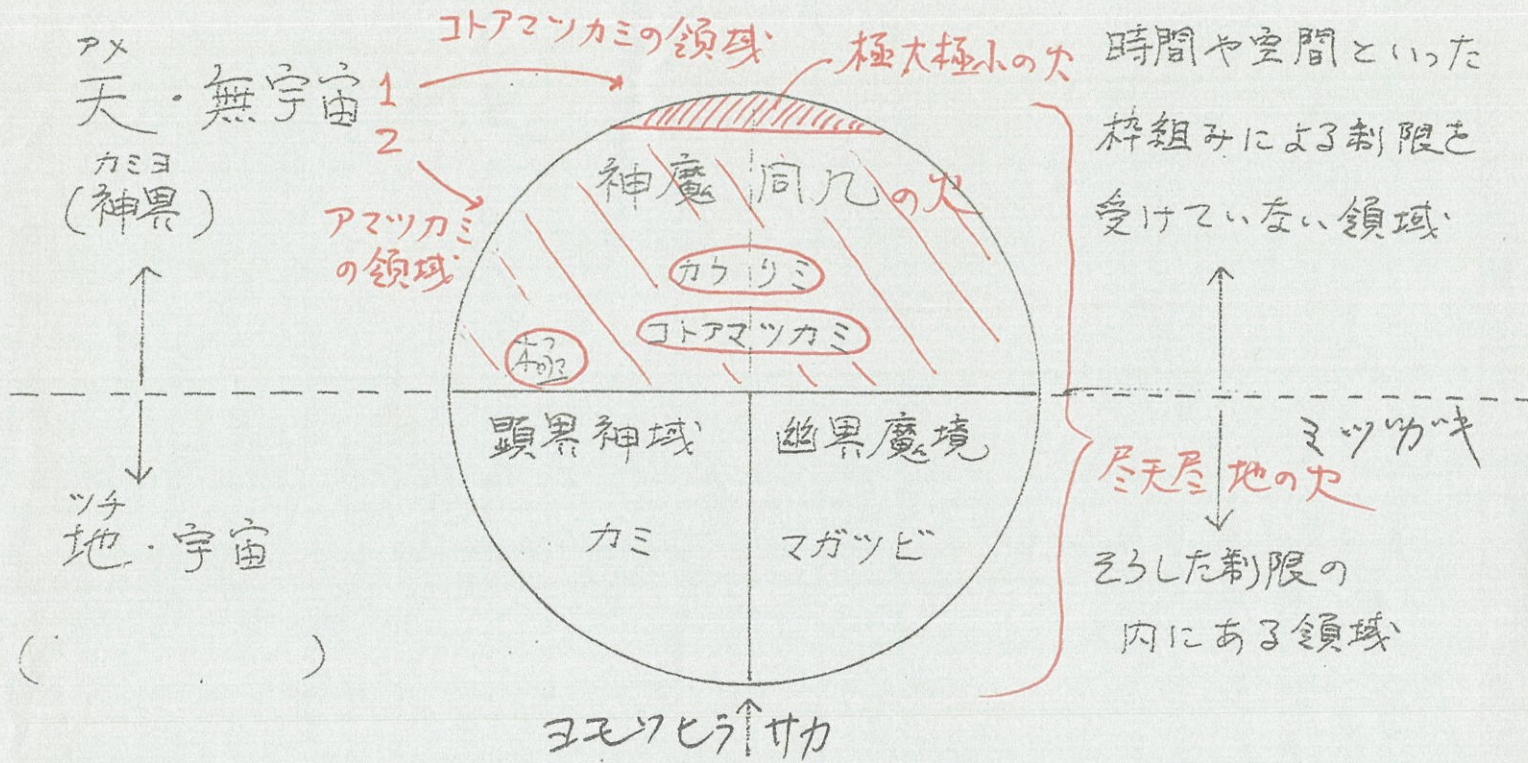
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100



アメノツチ
天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。



この二項対立の図式は、^{ツチ}地の側でのみ有効。

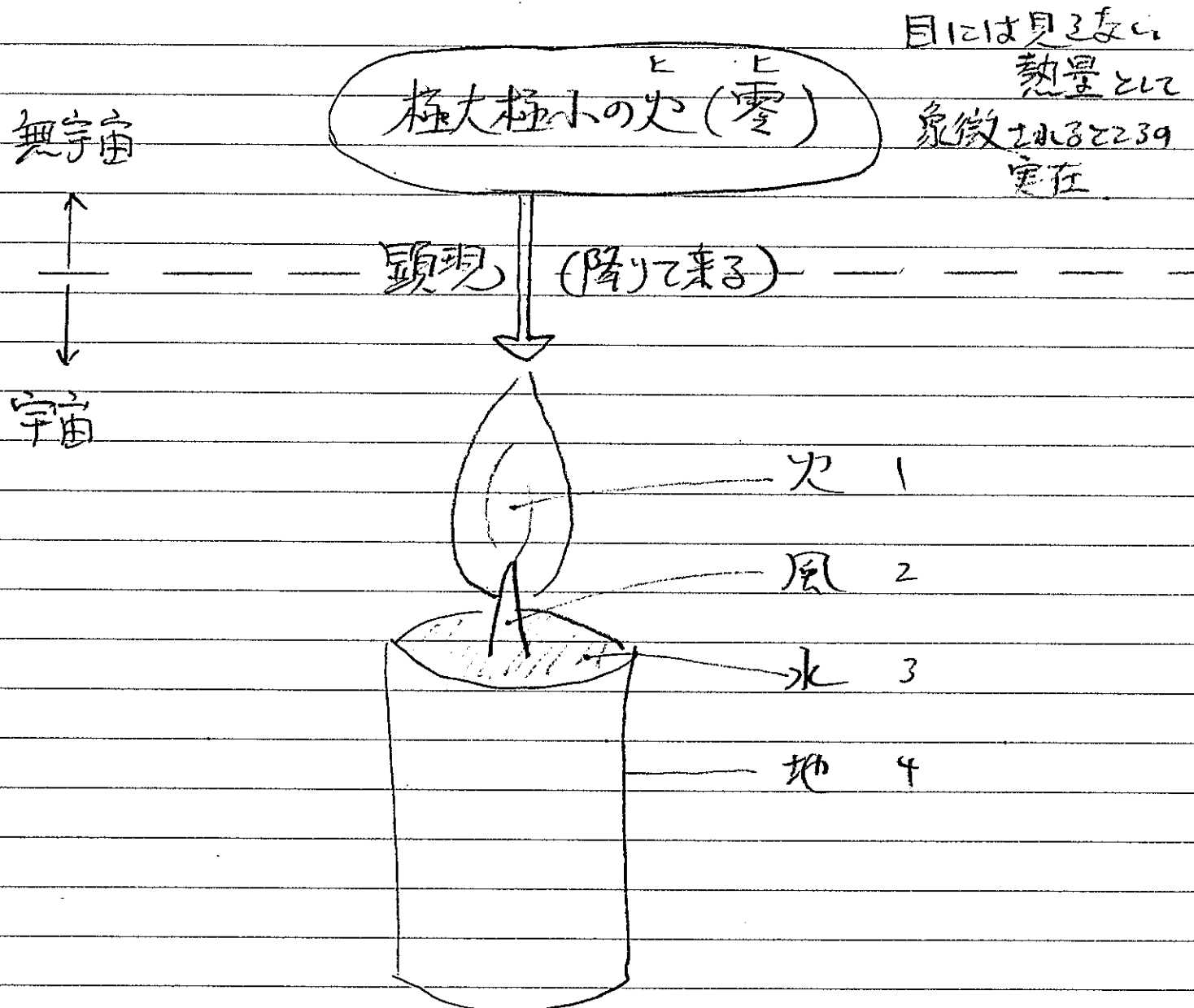
^{アメ}天の側には及ばない。

^{アメ}天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域。

“ 物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域。

無宇宙の火と宇宙の火



3つ2つの炎は、宇宙(第一階層)の火の象徴であり、

宇宙の火は、無宇宙の火が顕現したものである。

→ 3つ2つの炎を見ただけで、ここまで連想できるように
なるべきである。

2019.5.21.

万有の根本資料たる「零」について述べる。

「本質的に、人間にとっては「無」とでも呼ぶ以外には
どうしようもない何か」である。

即ち「人間の認識能力では全く認識することのできない
何か」である。

これを略して、「無」である、と言っている。

だが、それは決して「本当に何も存在しない」と言っている

のではなく、「無と呼ぶ以外には どうしようもない何か」が
「有る」のである。

多田流としては、これを「極」と呼ぶ。

即ち、「零」とは「(小の)極」であり、

それを「解りやすい表現」として「無」とか「欠」などと言う。

修理因成の修理（^{スリ}破壊・分解）の作用を、^{たと}喩として

「火で燃やす、焚尽する」と表現している。

「分解の作用」それ自体のことも、

「分解し尽くした後に残る^と零（分解の極）」のことも
まとめて「火」と表現している。

この「火」（^{スリ}分解の作用）は、特定の領域に^{とど}止まるもの
ではなく、ありとあらゆるものに適用される作用なので、

「地獄の火で、餓鬼道の火で、畜生の火で、修羅道の火で、

三千大千世界 焚尽の火である」と述べている。

「拜神瞑目して光を認むるは神命にして、其の位置と数と明と暗と滅と色彩と形状等とは、直に其の説明を與へたまへるものなり。」

①座を回りて多数の②あるを認めたるものは、赫々の火にして聖無動尊の加護顯著なるを示し、③高く一点の火を拜するものは、光明世界に住することを

教へ、③日ならざる一閃の火は八握劍にして、④全身零に坐する時は白玉身を悟證し得たる暁なり。

アアヒガテンジンユウアイコウとは称へまつるなり。

奉称することが

必要である。

アチメアチメオオオオオオオオオオオオオオオオ

アチメオオオオオ

アチメアウヲ

アアヒガテカジンユウアイコ

ウ

ウトノミヤシロ

ウトノカミミヤ

ウトノミヤ

ウト

ウ

ア

ハ

ヒ

フ

ク

フルベユラユラトヲフルベ

ユツツマグシ

ウ

ヤシマジヌミ

イウヲ

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウ

ウ

ク

ヒ

アチメ

ヨシ

ヒフハ

心して我は行かなん朝夕に神の心を心とはして

置く露を掃ひては行け朝毎に道の長途の長き旅路ぞ

アアヒガテンジンユウアイコ

フハヒフヘホ

一四

と

秘傳の説明

状況

→

その意味内容

拝神瞑目して光を認める。

何らかの神命である。

① 座を回りて多数の^{めい}一^しが
あるように見える時は。

聖無動尊の加護が顕著
であることを示している。

② 高く一^し光のたを拝している
ように見える時は。

(その人の意識が、今すでに)
光明世界にあることを教えている。

③ 日なる^し光の一閃の火^しが
見える時は。

八握剣の作用力が
(今ここに來ていることを示し)

④ 全身が零^しの^し光に座している
ように感じる時は。

白玉身(直日)と悟證した
時であることを示している。

おおよく、順序は①→②→③→④の順であり。

この④直日の悟證に至るためのコトワが、十四字秘言である。

同じ十四字をさらに唱え続けることで。

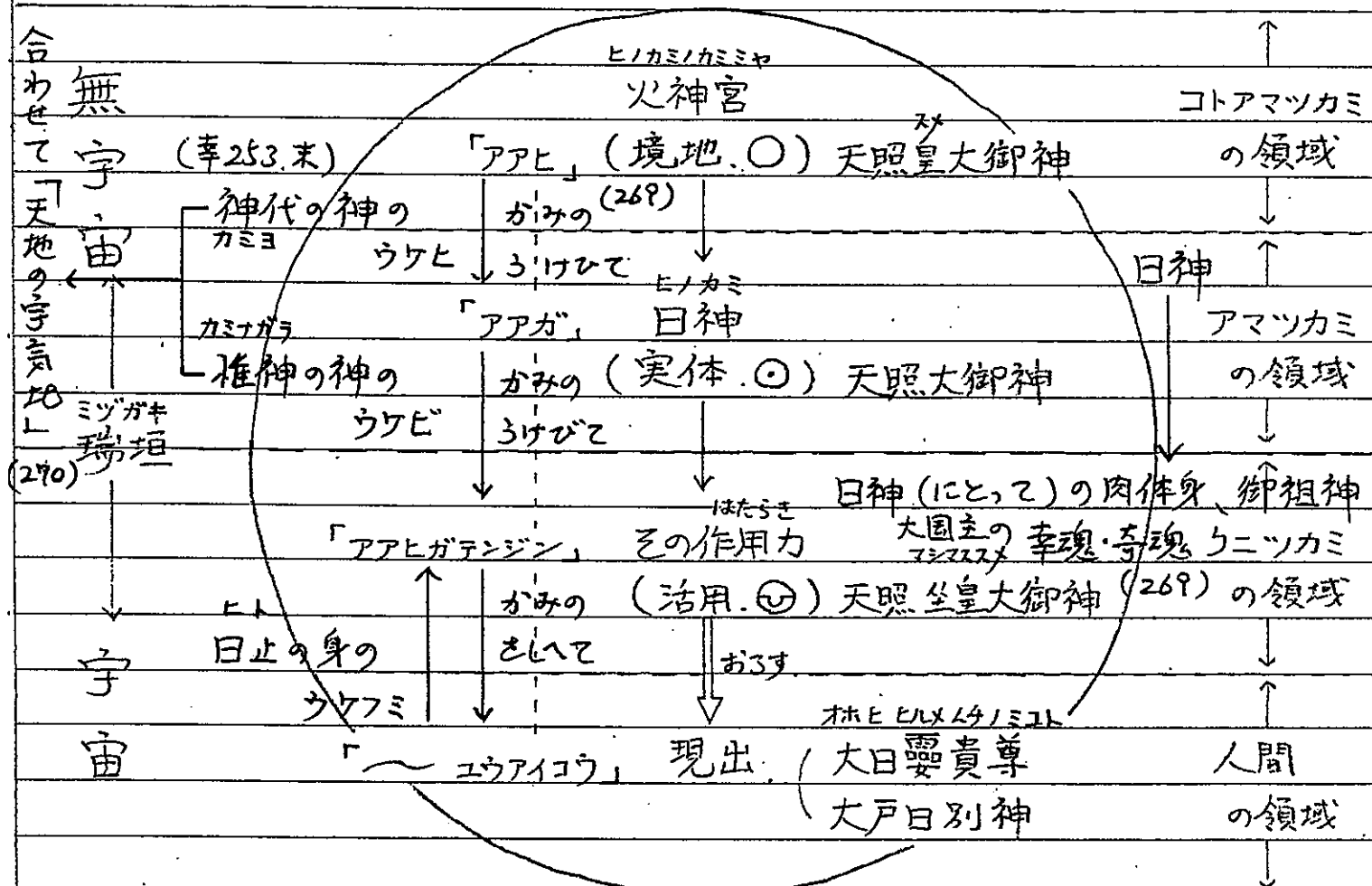
直日の作用力は全身魂に行き渡り、

その人は「この身このまま神と化^なる」のである。

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。
ヒカミ はたふま)



運命である。住ることとは無いの

觀世音菩薩佛界新生の菩薩を導き來

72

零の説明

球形である中心の力は同一であるから
同一距離に達するのであると説いて居
る。

然らば其の球の外は如何にと問へば
大宇宙とはあらん限りであるから其の
外と云ふことはない。大宇宙の外とい
ふことは無いので想像することができ
ぬ。唯大宇宙の球形であることを知る
のみである大宇宙の球形である如く小
宇宙もまた球形である一切は球の結成
である。冥想裡に容易に知ることができ
る事理であると答へて自己が大宇宙な
るかの如く冥想が一切なるかの如く空
囁いて之れが日本民族の宇宙観だと傲
語して居る。

けれども日本民族の古典には宇宙を
比と教へ大宇宙を比と傳へ小宇宙を比
止と云へるのみで球が圓か方か稜か線
か面か點かを云云しては居らぬ。

比の哲學者は誤れる言靈學を弄して
古典を曲解し謬見に堕ちたもので人間
身と示界との異別を無視し一切を人間
の尺度で計らうと思ひ量り得ると考へ
算へ得たと思ひ誤ったものである。

大宇宙は宏大である高莊である幽遠
である微妙である。一有一類一世界を
見て漫然と類推し得るところではな
い。

や統一する存在の盡
暁の海原遠く見渡せば天地は存在
の盡統一りにたる。

晃耀赫灼宇宙美趣朝陽赫赫天體美觀
鳥歌泉聲天地景致翻翻胡蝶輕羅舞。

流水は心有りて鳥の歌を喜び櫻花は
笑ひて雲の行くを止むるもので之れを
日本の古典は瓊和止茂茂由良と教へて
宇宙化育の祕神業である。

朝もよし城上の宮は神隨神の宇氣
比てかみかかります。

天照皇大御神の御田三處有り素盞
雄の御田亦三處有りと日本書紀の傳へ
たる美田沃地で高天原である。御田と

は借字で神言靈で晃耀赫灼たる天國樂
園である西方淨土である修理固成たる

天皇國である聖であるとの義で伊邪
那美神の火神業の功成りたる暁で天沼

矛の神傳である。

塞坐黄泉戸神で道反神で大禍津日
神であるところの伊邪那美神の神業は

地界魔境を調伏し濟度し救出するので
極大極小の火で陰で陽で男で女で陰陽

男女で非否で是不是で破壊で建設で死
生で死生觀であるから解脱である大悟

徹底である。聖無動經に出大智火以焚
燒一切魔軍而成大火聚徒非燒諸真衆而耳

自濟度し然らざる人人は神人を待ち或
は中有に彷徨してそのまま轉生輪
廻し亦是天祖の調伏濟度救出誘導攝入
に浴するので千態萬様に轉化變生する
のである。之れを湯津津魔具志と教へ
て轉變出沒の義である現象世界の實際
で生死遷流の事理である。

天祖の加美能加美輪散で生魂足
魂玉留魂の産靈で人類萬類は此の神
徳の中に杜りて其の神徳を現し得たり
と思ふのである。

けれども一切は唯宇宙の外なる加美
の力のみであるといふようなものでは
固よりない。殊に中古以來の人人が加

美の語義を忘れ美固止の何たるかを知
らず。そのうへ神を讀ふるに様の如き
人間的敬語を加へ更に御の語を重ねる
が如きは全く音義を忘れて言語の墮落
した為で最悲むべく深く誠むべきこと
である。

人間身雜糅で神魔紛争するもので風
雨時ならざる現象である。

然も此の中に杜りて念念勿生疑で唯
一筋に観世音の御名を称へまつる人が
有るならば具一切功德慈眼視衆生。皆
共に解脱。^{サトリサトメ}之れが観音佛智の力である
とは梵音たる加美能言^{カミノコトクダマ}靈の威嚴妙用は
人間身心の測り知るべからざるところ
であるとの義である。

はるひひめはるひひめはるひひ
め。ああひがてんじんゆうあいこ
う。

あまてらししますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらししますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらししますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらししますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらししますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらししますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

秘稿『日本天皇国』のまとめ

「コトアマツカミの領域」と「アマツカミの領域」とを二つ合わせて「高天原^{タカマノハラ}」と云う。

両者はともに「無宇宙」だが、「コトアマツカミの領域」は、「宇宙」の存在を前提としていない本来の意味での「無宇宙そのもの」であり、一方、「アマツカミの領域」とは、「宇宙」の存在を前提とした上での、それに^{あいたい}相対する領域としての、より限定された意味での「無宇宙」である。

万葉集の用語としては、前者を「莫囂圓^{バクガウエン}」と、後者を「莫囂圓隣^{バクガウエンリン}」と称する。

神道の用語としては、前者は「火神宮^{ひのかみのかみみや}」であり、後者は「天津神宮^{あまつかみのかみみや}」である。

また、場所によっては、前者を「アマ」と呼び、後者を「アメ」と呼ぶことも可能だろう。

タカマノハラ
ともに高天原

コトアマツカミの領域	アマツカミの領域
バクガウエン ひのかみ かみみや 莫囂圓 火神の神宮 ヒ 国無きの日 カガミ (国を産出するの祖) 大宇宙の大中心 天照皇大御神 (火神) ヒノカミ 極大極小 (アマ)	バクガウエンリン あまつかみのみや 莫囂圓隣 天津神宮 ヒの国 ミカガミ (カガミノフネ) 宇宙の中心 (人間身では根本魂直日) ナホヒ 天照大御神 (日神) ヒノカミ 最大最小 (アメ、天)
「日本民族発祥の神界」も 「日本天皇の祖神」も、実は、 アマツカミ (伊邪那岐命) ではなく コトアマツカミ (天照皇大御神) なのだ、という意味	アマツイハサカ アマツクニ アマツクニタマ 天津盤境 天国 天国魂 ムスビ カミ ミムスビ 産霊の神 皇産霊 有限の (中での) 無限なる世界 万世一系の世界→十二神界 (イザナギ) ヒノワカミヤ (ヤマト)

以上、秘稿「日本天皇国」より抜粋

極 = 神魔同凡の㊦

即.

根本資料

直日

(禊) カムロキ
カタメナス

顕界神域
ナカツクニ

生

箇体

死

資料

カムロミ (禊)
スリ

幽界魔境
ヨモツクニ

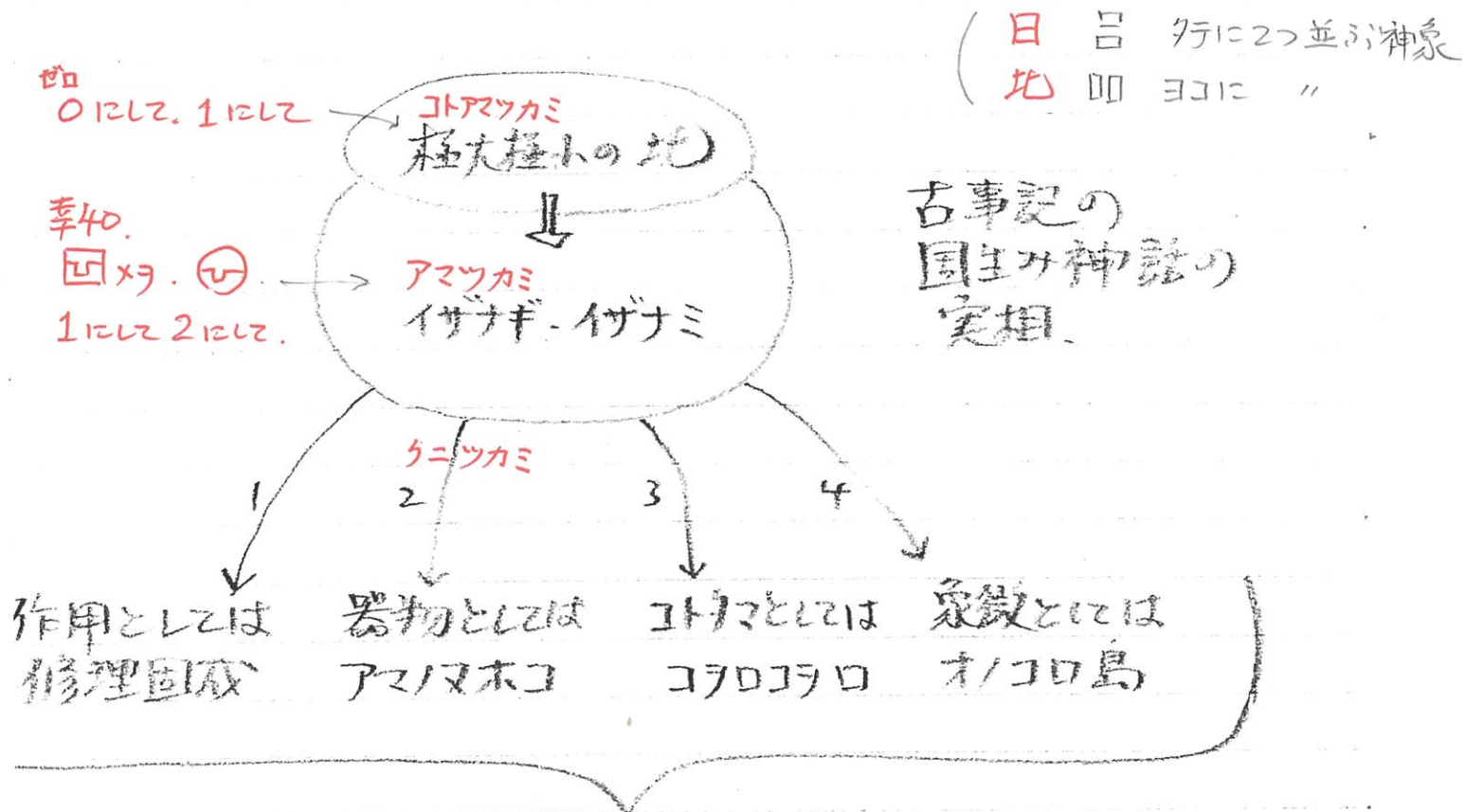
スリ

ヨモツヒラサカ

おとらくは、個々の用語が古くから使われており、

それぞれの用語を文飾でつなげた結果として、

古事記のような神話物語となった。この神話の内容は『「極大極小の地」が、「二にして一」であるイザナギ・イザナミとして、宇宙を修理固成している』というもの。



実際には、
同じ一つの状況。

↓
「無宇宙から宇宙が生成される際の状況」

秘稿『日本天皇国』のまとめ

「コトアマツカミの領域」と「アマツカミの領域」とを二つ合わせて「高天原^{タカマノハラ}」と云う。

両者はともに「無宇宙」だが、「コトアマツカミの領域」は、「宇宙」の存在を前提としていない本来の意味での「無宇宙そのもの」であり、一方、「アマツカミの領域」とは、「宇宙」の存在を前提とした上での、それに相対^{あいたい}する領域としての、より限定された意味での「無宇宙」である。

万葉集の用語としては、前者を「莫囂圓^{バクガウエン}」と、後者を「莫囂圓隣^{バクガウエンリン}」と称する。

神道の用語としては、前者は「火神宮^{ひのかみのかみみや}」であり、後者は「天津神宮^{あまつかみのかみみや}」である。

また、場所によっては、前者を「アマ」と呼び、後者を「アメ」と呼ぶことも可能だろう。

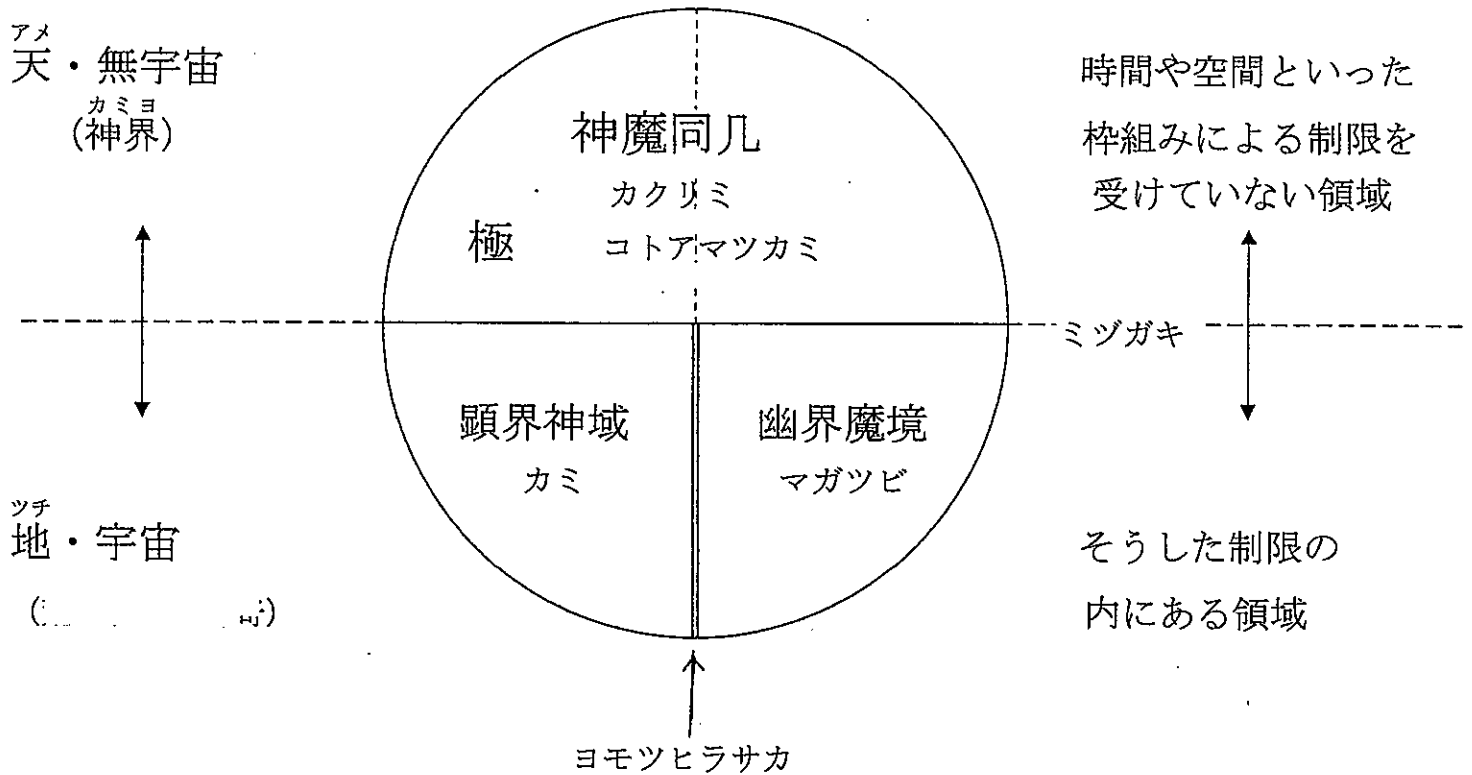
タカマノハラ
ともに高天原

コトアマツカミの領域	アマツカミの領域
バクガウエン ひのかみ かみみや 莫囂圓 火神の神宮 ヒ 国無きの日 カガミ (国を産出するの祖) 大宇宙の大中心 ヒノカミ 天照皇大御神 (火神) 極大極小 (アマ)	バクガウエンリン あまつかみのみや 莫囂圓隣 天津神宮 ヒの国 ミカガミ (カガミノフネ) 宇宙の中心 (人間身では根本魂直日^{ナホヒ}) ヒノカミ 天照大御神 (日神) 最大最小 (アメ、天)
「日本民族発祥の神界」も 「日本天皇の祖神」も、実は、 アマツカミ (伊邪那岐命) ではなく コトアマツカミ (天照皇大御神) なのだ、という意味	アマツイハサカ アマツクニ アマツクニタマ 天津盤境 天国 天国魂 ムスビ カミ ミムスビ 産霊の神 皇産霊 有限の (中での) 無限なる世界 万世一系の世界→十二神界 (イザナギ) ヒノワカミヤ (ヤマト)

以上、秘稿「日本天皇国」より抜粋

アマツチ
天地概略図

アメとツチを合せて、大宇宙と称する



この二項対立の図式は地^{ツチ}の側でのみ有効

アメ^天の側には及ばない

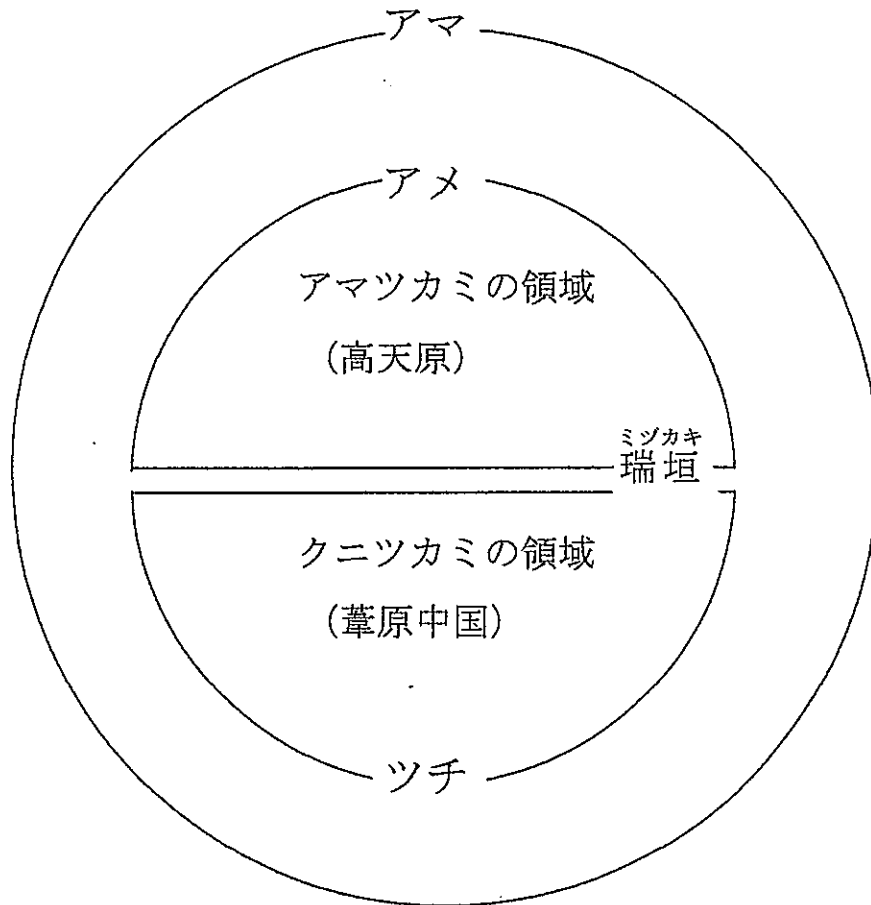
アメ^天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域

アメ^天とは、物理的に言えば、宇宙創世以前の領域

天地概略図 第二版 (あくまでも概略)

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	^{アマノイハヤ} (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



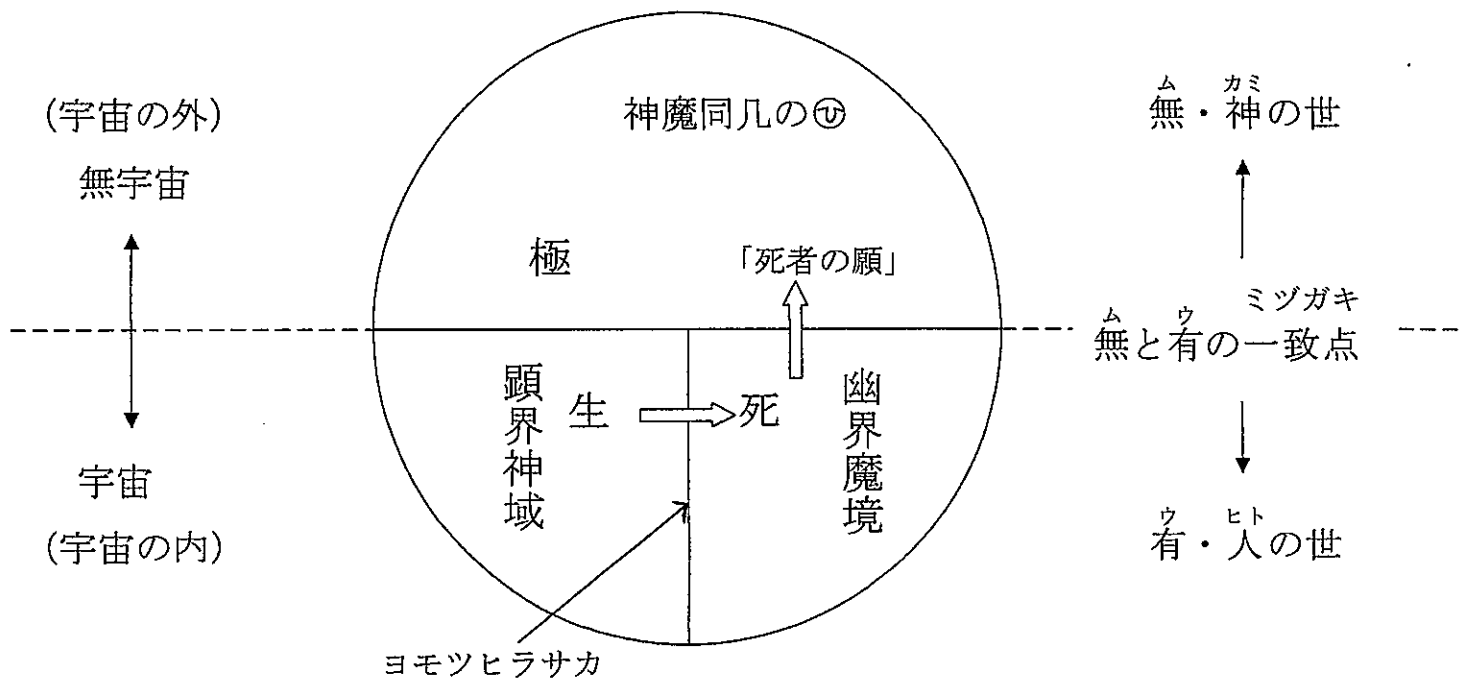
○「^{タカマノハラ}高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の^{ナカツクニ}中津国) と幽界魔境 (マガツビの領域、^{ヨモツクニ}黄泉国) とに分かれている。

(第一版を参照)

死者の願ひ

「㊦の教へより」



1 頁下段 「人間的身心の明らめ難き〇」とは、

『無宇宙の零は、人間の身では明瞭に認識することが極めて困難である』
という意味。

仮に〇と表現しているが、この同じ実体を、「種子」としては㊦と描き、
「その㊦のままに築かれた筒体」を⊕と表現する。

2 頁上段 「無と有の一致点」

上の図では、宇宙と無宇宙とを合わせて一個の円で表現してしまっている
ので、図象としては「一致点」ではなく、「境界線」になってしまっている
が、これは単なる表現上の問題であって、何ら本質的な差異ではない。

「極」と「火」の表現の意味

垢穢を掃ひ浄土を築き苦悩を去り楽土を成すためには、「零境」に徹することである、とする。

「零」とは「無」であり、「無」が極まると「有と化する次元」のことであり、之を別の詞では「極」という。

極とは、「一切を脱却するもので、脱却したるもの」の意味である。

これを人間身として理解できるものでは「火」で表わす。

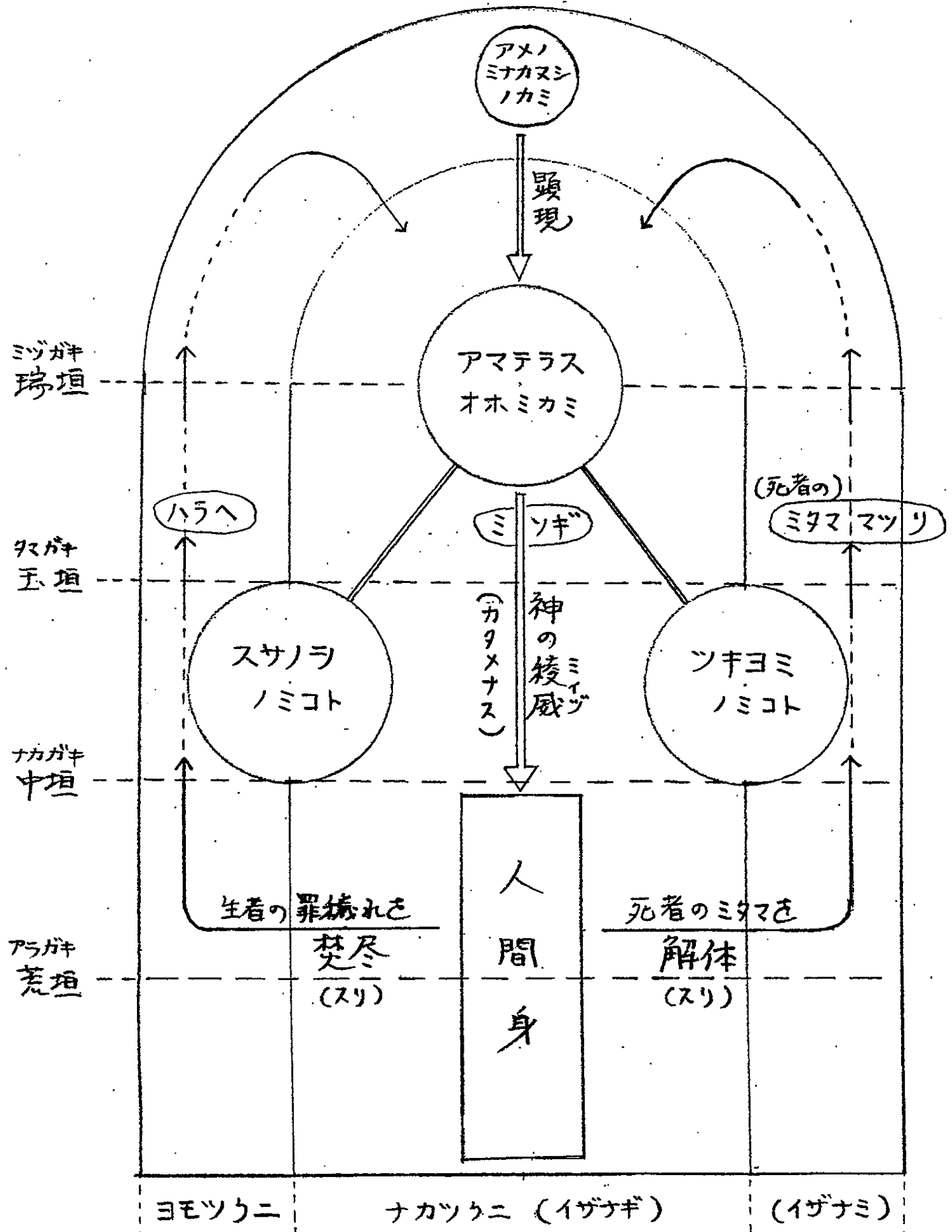
日本天皇の神伝である「大祓」の秘儀として、「火」を掲げることにより、一切衆生を靖寧和平ならしむるとされるのは、この意味である。

「極」とは、別の詞で表わせば、「無の有」、「極大極小の火」、「無と有の一致点」などと表現される。

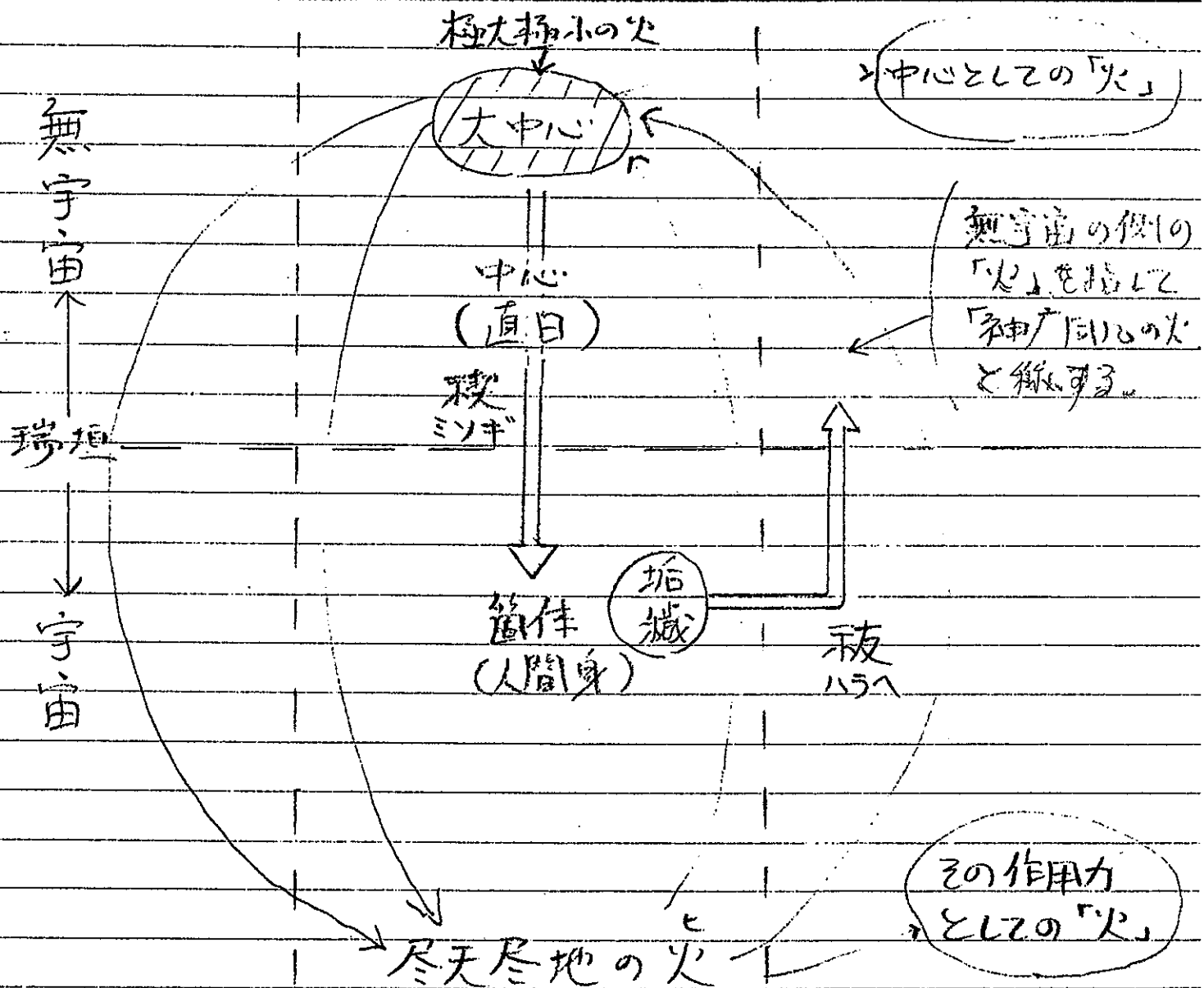
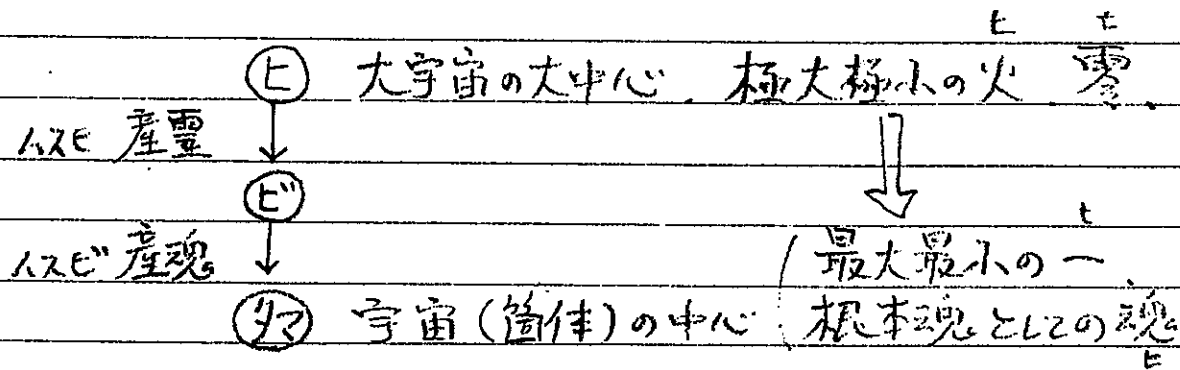
また、死者を「斎る」ということは、「分裂分散していく身魂」を速やかにその「極」に達せしむるという意味がある。

また「火」は「ヒ」と称し、他の文字で表わすこともある。

付図4: ミコトとしての基本形 (平坂 弘
その1.)



2020.1.21.(火)



ヨモツクニ ← ナカツクニ → ヨモツクニ

己の位置分限を忘れて他の位置分限を干し害ふものでありまた其の結果である。此の意味で総べて正しからざる存在を「ツミ」と呼ぶのである。

「罪事^{ツミ}」とは其のやうなのであるから之れを祓却するには

第一 各自各自の位置分限を明にすること

第二 位を正しく名を正しくして数を知ること

第三 数を算^ミみて中心と外廊との総合統一を為すこと

第四 神象と神声と神数との不三不一不二なる零を明にすること

第五 零の一にして一の零なる超絶世界に住むべきこと

第六 一二三四五六七八九なる秘言を称へて神命を仰ぎ神命に応へまつること

第七 日^{ヒト}止と火^{ヒト}人と人^{ヒト}との一躰なる事実を顕現すること

第八 天磐座を築くこと

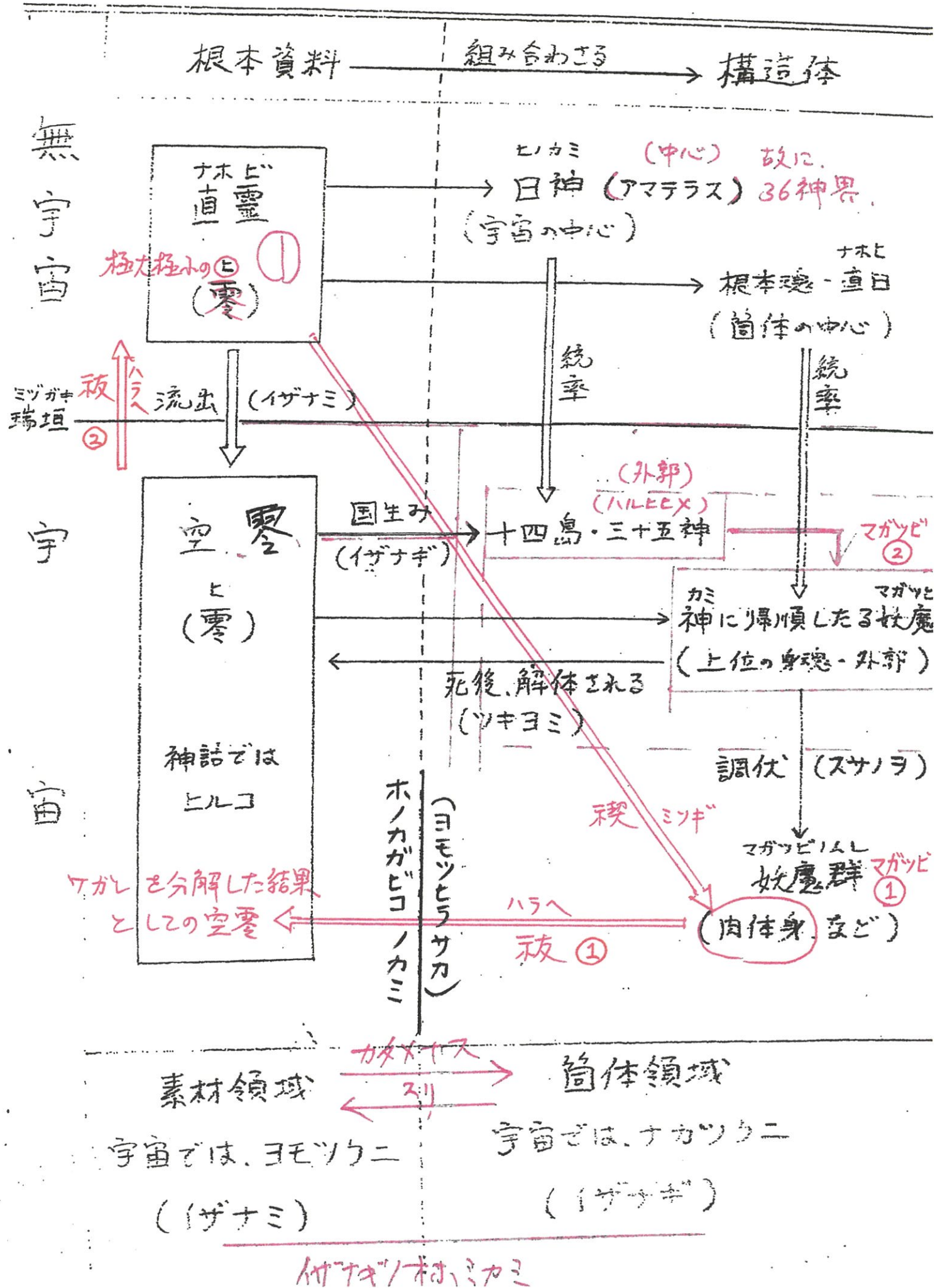
第九 九が一にして十なることを明にすべきこと

第十 中心と外廊との不二一なる事理を明にすること

然うすれば根国も底之国もそのままに高天原と呼ぶるのである。それは九の魂が統一して十魂尊貴の玉体と成り天照日之御子として天津日嗣を知ろしめし給ふのであり亦其の御業に随順しまつるものである。則「罪事^{ツミ}」も「罪事^{ツミ}」ではなくて明く清く直く正しく善く美しき神界樂土を顕現する資料と成るのである。

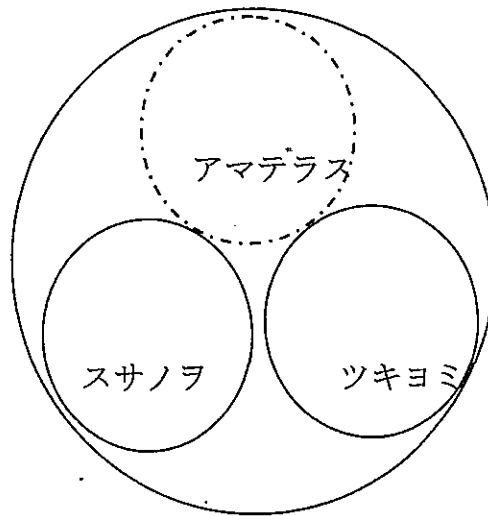
此の「天津宮事^{ミコノミヤノコト}」「天津宣事^{ミコトノリ}」の神儀としての「天津金木」とは大宇宙の大中心を此に此のまま拝むのであ

修理図式の機能図 直霊と空零



(仮称) 零の神

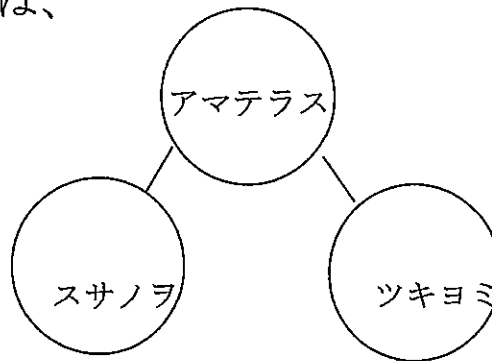
零の神としての三貴子
ひとまとめ



全体として天祖^{アメノミオヤ}

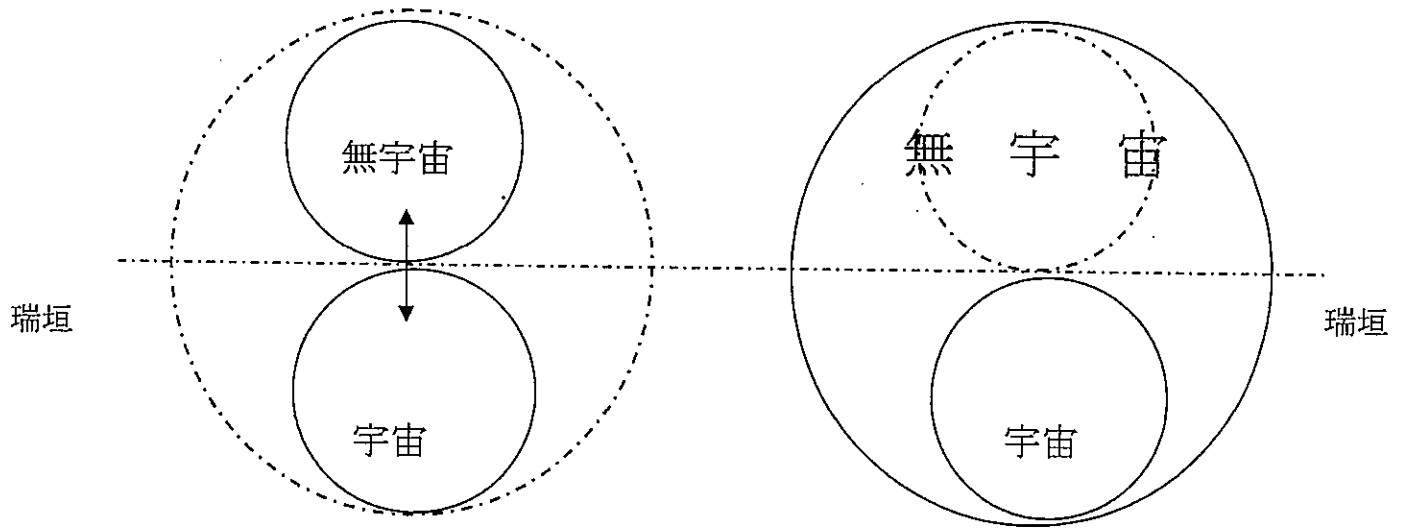
瑞垣

魂の神としての三貴子は、
一応三つに



あくまでも考えの問題

(1289) 無宇宙



宇宙の側からの
視点による理解

二項対立あり

スサノヲノミコトの立場

ハラへの境地

無宇宙の側からの
視点による理解

二項対立なし

アマテラスオホミカミの立場

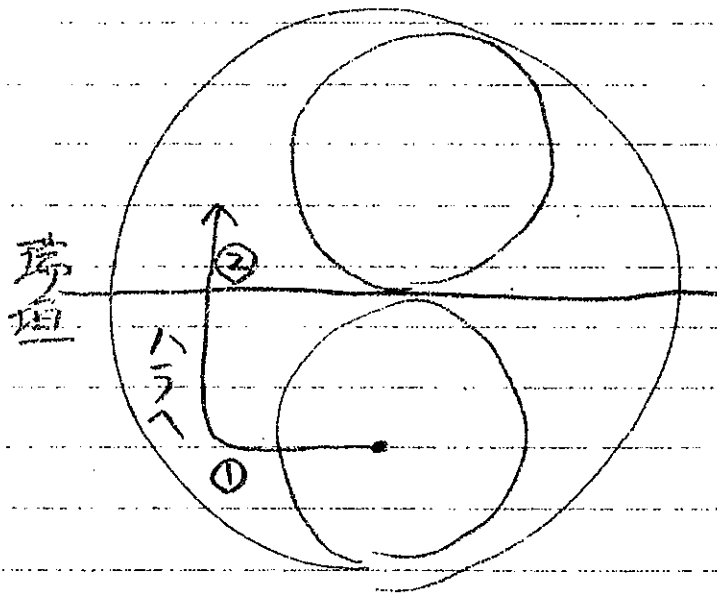
ミソギの境地

ハラヘ

被①.②の構造

被への意識

被の意識



PX ツチ

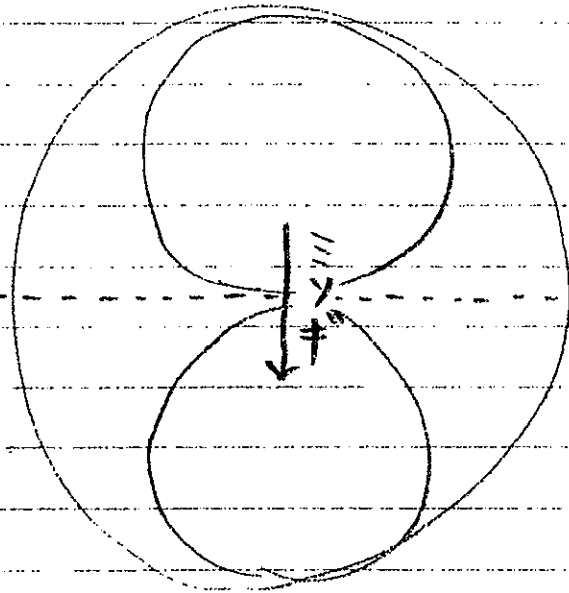
天と地は別。

ツチ

地の側にあるワガシを

外側(ヨモツク=)経由で

無宇宙に被る。



ツチ

PX

地は最初から天の一部

PX

天の側にあるミイツを

そのまま宇宙へ注ぎ込む。

(外側を経由しない)

段階としては①.②の2段階

を「想定」することができるか。

実際には全く一連の行為である。

二灯の意味

向かって左の灯

(神が3見て右、カキナ) ミツキ
→ 稷

向かって右の灯

(神が3見て左、スリ) ハラヘ
→ 祓

① ノリトによって、左の火を
ツトアツカミの領域

(火神ミカミ 天照皇太御神)
の零とする。

(即、極大極小の火=零)

① ノリトによって、右の灯を
火神カグツチの火とする。

② この灯によって、祓行事を行ない、
罪穢れを焚尽する。(ハラヘ①)

② これを各人に伝ぎ込む
ことで、稷行事を行なう。
ミツキ

③ 焚尽された結果としての火
(ここでは 尽天尽地の火と表現)
を、さらに無宇宙へと送る。

(ハラヘ②)

祓の意味

白玉の、眞玉勾玉、眞つぶさに、統一する御魂。天なるや、御中の神と、神知らすなる。

怪奇異靈の神魔殿。神魔本來非神非魔。古老は、之を教へて、「神魔同凡の天御鏡」なるぞと云はれたのである。過去を祓ひ、また過去を祓ひ、祓ひ祓ひても、人間身天降の時が判らず、天地の判別がつかず、自己本來何物であるかに徹し得ないとすれば、また更に、火之迦具土ホノカグツチの神徳を仰ぎて、幽界魔境に入るのである。

その幽界魔境とは、伊邪那美神の黄泉國なので、八種雷の荒び狂ひ、黄泉醜女の亂れ騒げる斯許米伎繁國シコメキシキクニである。此の國に入るものは、何如なる罪障宿業も焚き盡されて、速佐須良比咩ハヤサスラヒメの「ミマモリ」を得るから、此の身此のまま、此の土此のまま、此の時此のまま、一圓光明の妙相妙用を現するので、過去にあらざる將來にあらざる、現在にあらざるの過今來を明らめ得るので、此の土此のまま「鏡の船」で、此の身此のまま「神の身」で、此の時此のまま「神の代」で、「○神・○魔」ヒシシヒマ。是の如くに往き是の如くに來る。

此のやうな祓。その祓の結果を、延喜式の祝詞には、「高山の末短山の末より、さくなだりに、落ちたぎつ速川の瀬に坐す、瀬織都比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。此く持ち出で往なば、荒鹽の、鹽の八百道の、八鹽路の、潮の八百會に坐す、速開都比咩と云ふ神、持ち可吞みてむ。此く可吞みてば、氣吹戸に坐す、氣吹戸主と云ふ神、根の國、底の國に、氣吹放ちてむ。此く氣吹放ちてば、根の國、底の國に坐す、速佐須良比咩と云ふ神、持ち佐須良比失ひてむ」とて、四段の祓を教へ、「今日よりはじめて、天地の在りのことごと、罪と云ふ罪は有らじ」と云へるもの。上天下地唯見る稜威の赫灼たるのみである。

是の如くに往き、是の如くに來る、神魔同凡の火は、東西古典の傳燈で、何處何如なる民族も、古より今に到るまで、仰ぎ來り褒め讃へて止まざる唯一無二盡天盡地の○であるから、○神とも○魔とも呼ぶ。神ならざるの

神で、魔ならざるの魔で、「ヒ」と稱へまつるのほかはない。先師は、稜威會の宣言書に此う書いてある。「いかに其の信仰解釋實行の形式に於て文野高卑の別あればとて、一として邪道のみのもなく、魔法のみのもなく、均しく是れ根本大本體の天照なり、發顯なり。天照發顯としての一大活躍態なり。正邪一道、神魔一體、或は正となり、或は邪となり、或は魔、或は神たりつつあるに過ぎず。奚ぞ矧んや、其の正なるもの未必しも正ならず、其の邪なるもの未必しも邪ならず、魔、魔にあらず、神、神にあらずるものあるに於てをや」と。それから、教典捧讀の注意書には、「夫れ球體に於ける内容の中心は、唯一不二にして絶対無比に候ぞ。内容の中心より表はれたる輪廓の中心は、到る處に存在し居る者に候ぞ。内容に於ける中央の中心は、其の周圍十表に於ける群中心を一貫統一し居る有様を見よ。是れ宇宙の中心が延長して、宇宙と成り、其の宇宙には、分分微微に、中心のあることを證明したものである。中心より出づるものは中心なるからである」と記されてある。さうして、また別に、「零即一」とか、「無經無緯の高玉座」とか白されて、此の「ヒ」を稱へて居る。

此のやうな「ヒ」の結び結びたる人天萬類であるから、善惡美醜是非曲直と、まるで反對なことを思ひもすれば行ひもする。種種様様と數限りも無いことを、肯定もすれば否定もする。一見何とも複雑至極である。

此のやうな中に、其のやうに生活しつつある人天萬類は、常に怒濤狂瀾の有様で、黒風暴雨の状態で、一日一時とても晏如たることを許されない。で、人人は間斷無く神音を稱へつつ、靜寧和平の神國樂園を築くやうに心掛けねばならぬ。

自己として築き成したる神國樂園は、何如に狭くとも小さくとも、國津神輪なので、天津神の詔せのままに、天沼矛の神事に隨順し得たので、聊なりとも神命に應へまつることを得たるもので、「産土神」と祀らるるのである。

幸199頁 5~9行目. (大意)

この国(幽界魔境)に入る者は、

ハヤサスラヒメの「ミマモリ」を得るから、

(これは略称であり、実際には「セオリツヒメ、ハヤアキツヒメ、イブキドヌシ、ハヤサスラヒメのミマモリ」の意味である。)

この身このまま「神の身」となるのである。

[200頁 3~2行]

自己として築き成したる神国楽園は、

(この身このまま神の身と成った時の、その領域は)

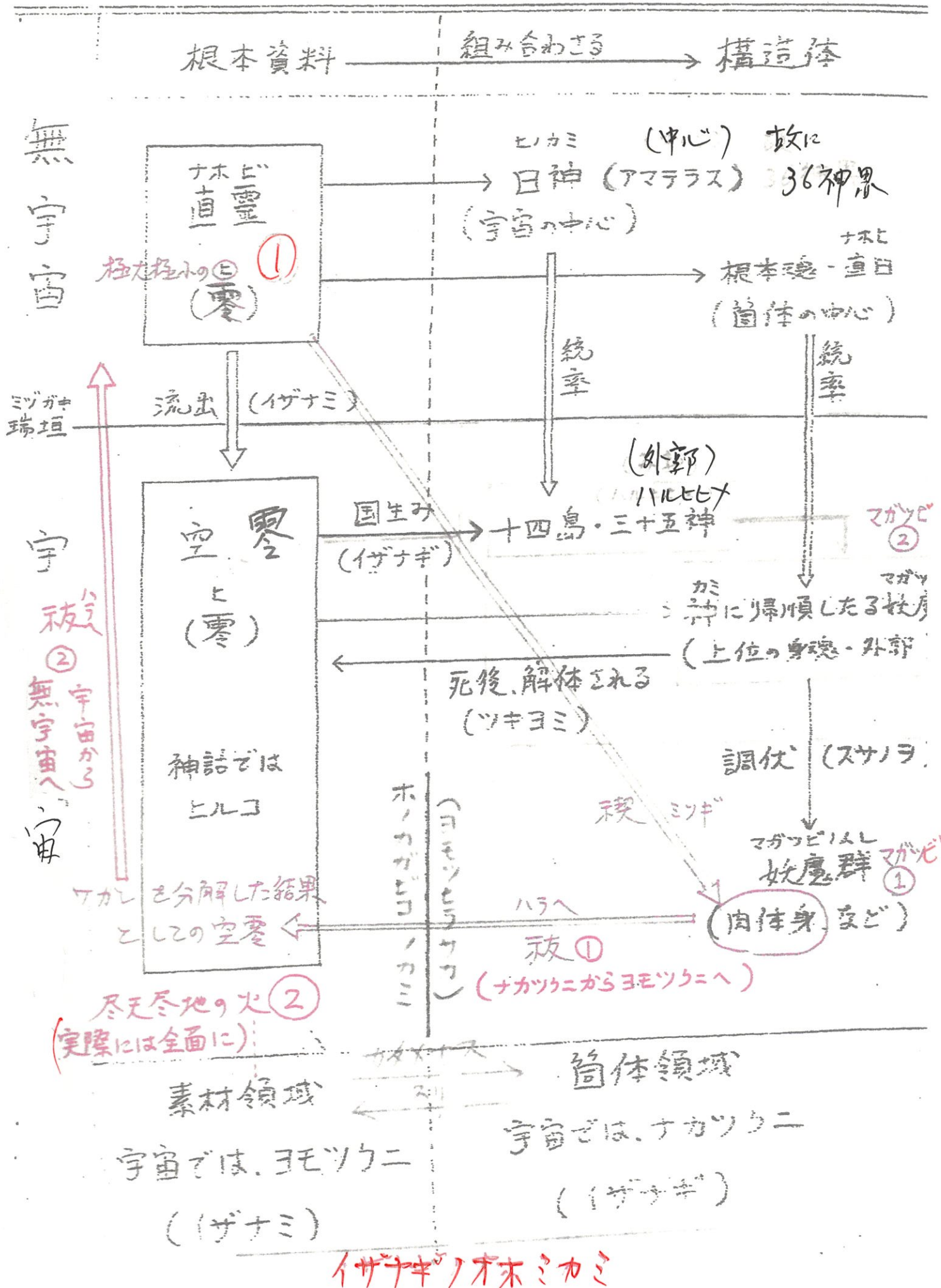
どれだけ小さくとも 国津神輪であり、

天津神の^{おほ}詔せに^{こた}応えることができる存在なので、

それ故に、国津神の一員として、「産土神」として、

祀らねばならない。

修理図式・機能図



無宇宙の「零」と宇宙の「空零」

まず「大宇宙」は「無宇宙」と「宇宙」とに分かれる。

即ち、「結ばれざる」と「結ばれたる」とである。

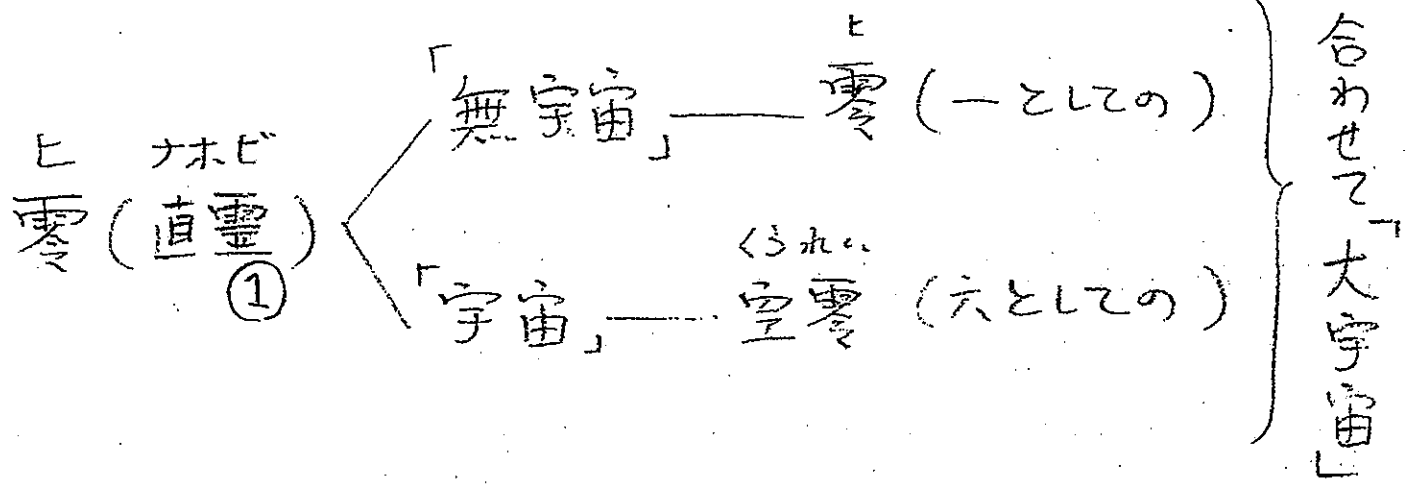
「宇宙(國)」全体を統一体としては「全宇宙」とも称する。

単に「宇宙」とだけ言った時には、しばしば、「全宇宙」の構成要素である個々の「箇体(小宇宙)」を意味している。なので、注意が必要である。

また、数理としては、「無宇宙」の側にある「零」は「 -1 としての零」であり、「宇宙(全宇宙)」の側にある「零」は「 0 としての零」である。実体としては同じ「零」なのだが、「箇体(小宇宙、数理としては五)」が成立する以前の「零」が、その後の「零」からの違いである。

前者は「箇体」の成立に際して「中心」となり得るが、後者はもう「中心」とはなり得ない。他の「箇体」に「外郭」として組み込まれるだけの存在であり、

「空零」と称される。



「宇宙」 統一体としては「全宇宙」
個々の「箇体」を指しては「小宇宙」

- ナホヒ
直靈 ① …… ヒの段階のナホビ 零 そのもの
- 直靈 ② …… ビの段階のナホビ
結ぶ止めたる靈 即ち魂、ツミノミ

古事記は、その劈頭に、「高御産巢日神・神産巢日神」と稱へてあるが、之は神代の神の御上で、人間身の出生を教へたのではないから、「日」の字を用ゐ、日本紀の「高皇産靈尊・神皇産靈尊」と記して、「靈」の字を用ゐたのと同じやうに、「ヒ」の神の御事と拜するのである。

ひのかみの、かみわざなりて、ながむれば。あめつちは、いまや、みすまる。あめつちは、いまぞ、わか
る。はるひひめ、しらすはるのは、かみのはな、いまさかりなり、おほひひるめのひたかのみのくに。

その國は「日」の國で、その神は「日」の神で、人間身の未成らざる神界の事理である。さうして、清陽と重濁と、或は、精粗と、厚薄と、様々の異別は有るが、眞理は一貫して變らず、事實は眞理を離れるわけが無いから、人間身も、神代の事理をそのまゝに、「ムスビ」「ムスビ」し「ミ」である。唯、その神界を出でて幾度轉神代を去ること幾時空。そこに隔りが出來たのである。隔りを我と我が身に築いたのである。

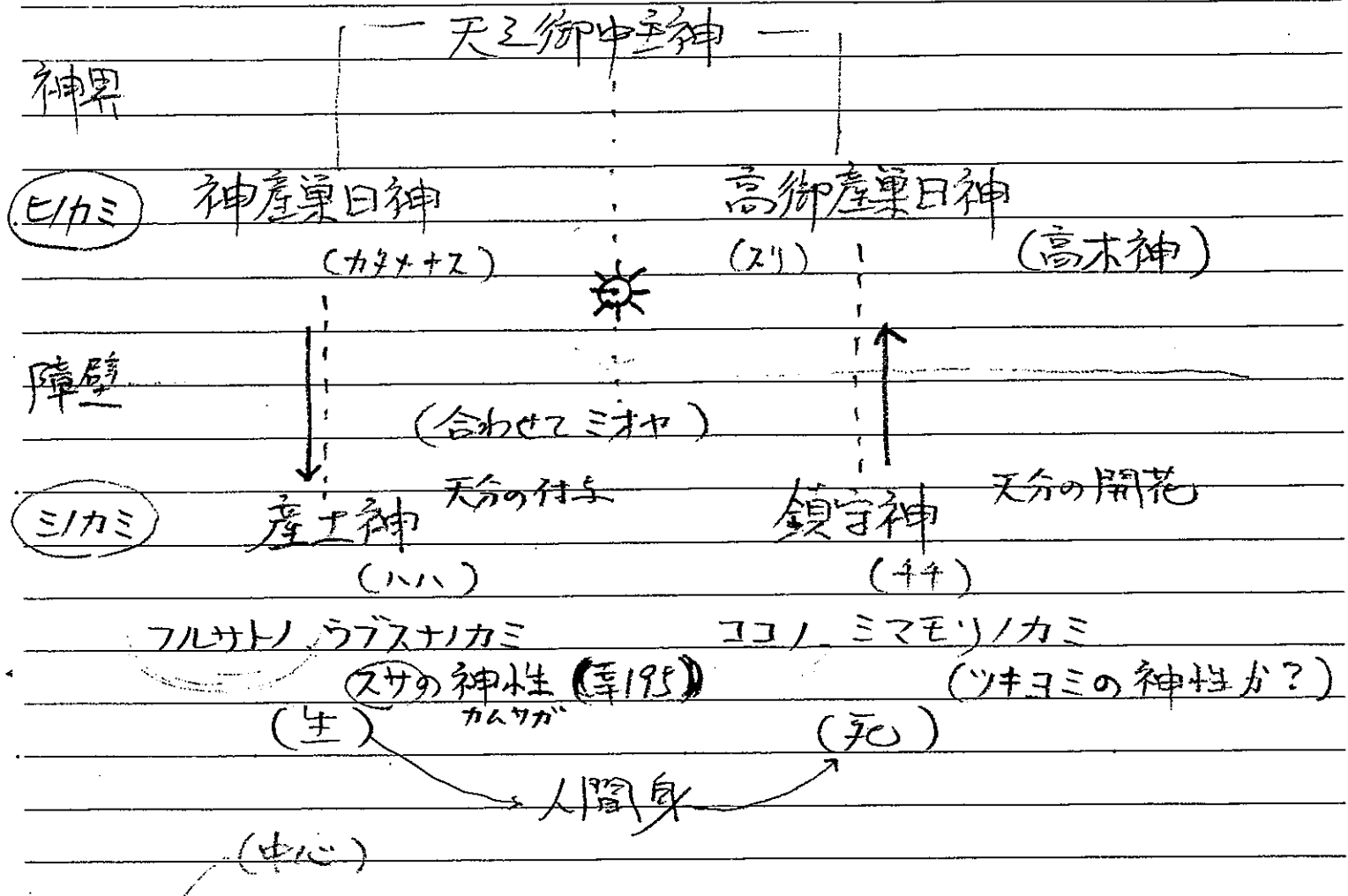
もしも、其の隔つるものを取り去るならば、この身此のまま、神代の神に連るので、生死一貫、顯幽一途。日神の^{ミタ}^{ミヒクリ}^{ミタ}の^{ミタ}指し透るのである。その上で拜みまつれば、**産土神とは、神産巢日神祖命**にてましまし、**鎮守神**と**は、高御産巢日高木神**にてまします。

御

天^{アマ}なるや、天^{アマ}の返し矢、天^{アマサカ}離る、夷女^{ヒナツメ}の子が、神ながら、氷^{ヒメ}目矢^{メヤ}を受けて。神守る。眞賢木立てて。高知
るや、天^{アマ}つ國玉。高彈くや、天^{アメ}の詔琴。人の身を、神とはすべく、人皆を、日止と成すべく、大虚空、焚き

2018. 9. 5. (水)

幸195-196.



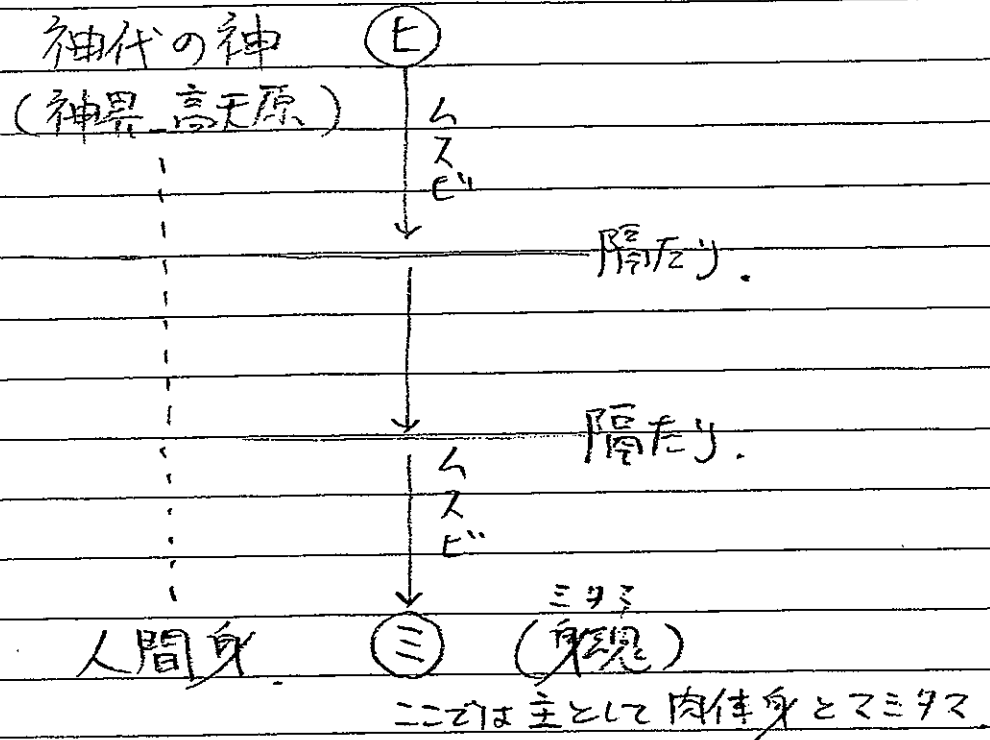
☀ 日神の御田の御光がさしとおる。とは

「今、ここ」もまた、その外郭となる。

即ち、高天原の一郭となる。ということ。

2018.9.5.(水)

幸260.



隔たりと取り払って考えれば、

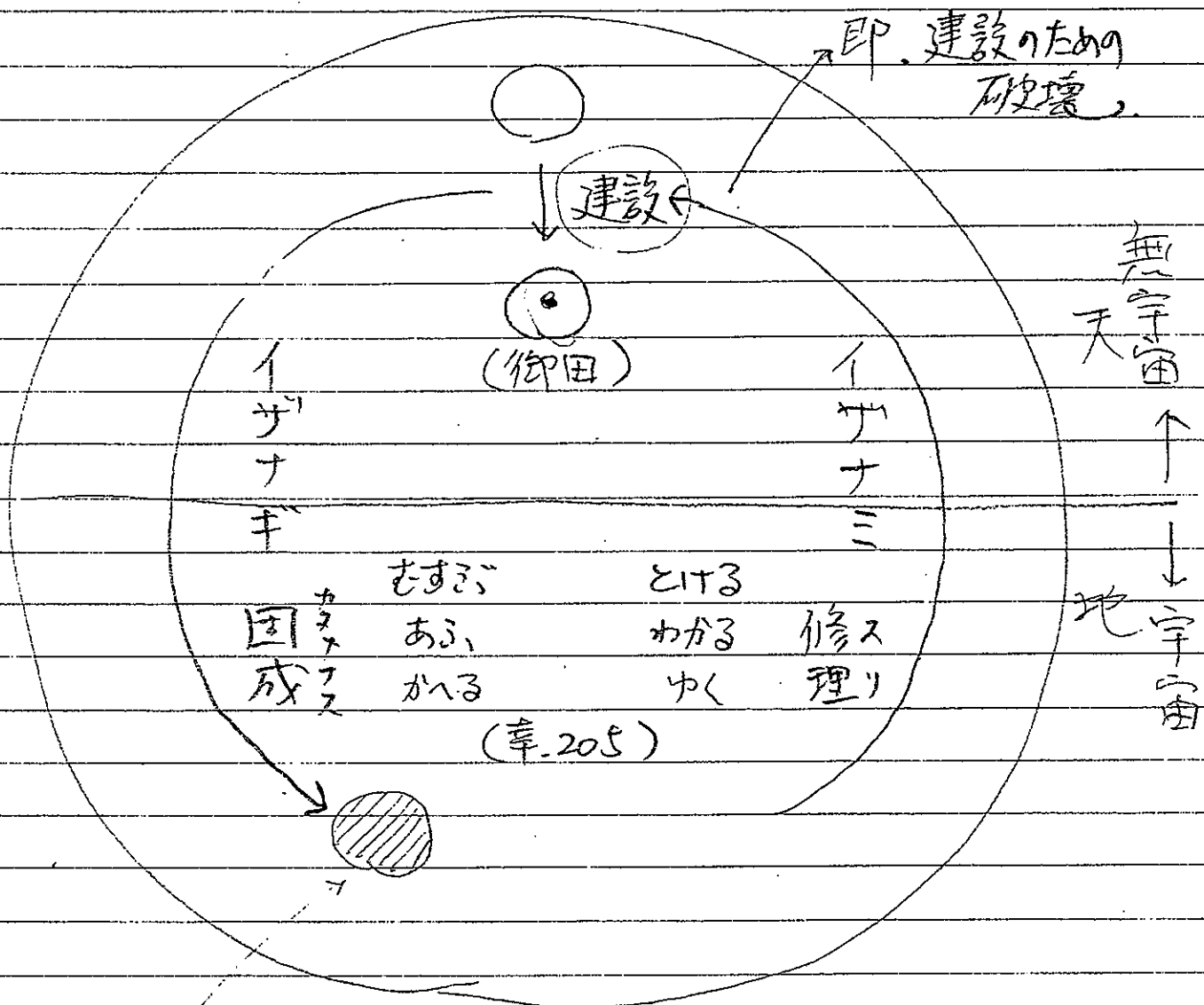
人間身もまた ヒカミ に直結している (生死一貫 顕幽一途)

ヒカミ ミツ

逆に言えば 日神(中心)の ミツ のミヒカリが
「今こ」にさしとあて、

「今こ」もまた 高天原の一部であると解るようになる。

→ さらすれば、産土神が神産巢日神のウツシオミで
鑲宇神が高御産巢日神のウツシオミである
と解るようになる。



「イザナギノカミの神業の成り成りたる日夢」

「天地は存在の尽尽 統一りにた子」という状況

アツク アリ エゴト ミス

ことを明らめ得たる時、各自各自分分個個としての入天万類がそのまま、身魂であり魂であり零である事実を顕影して一円光明の○と成る。人の身なり神と成り得る時、
既清

各自各自が○と成り得たる時、緯としては神界で経としては神代で経緯を合せては十で、共に「一」である。之を「日」であり「日神」であり「人」であると云ふ。その「人」とは、「日止」であり「火人」であることを教へて⊕と描き田とも⊕とも品とも品とも日とも串とも申とも伝へて、言たる示である。そうして又、と画するのは伏羲の所伝を敷衍したので「湯」であり「ユ」である。それを日本の古典には「中津瀬」と伝へて純真無垢の一点で中心であることを知らしめてある。之を「否なり」と呼ぶ。「そのやうなものの有るのではない」との義である。

珍重珍重。如是の「否」。如如起滅。怪奇至極。故に呼んで「神」となす。之は支那人の「无方」と云ひ「陰陽不測」と称するところの「神」である。

世界の学者中には此のやうな「神」は日本人云ふ所の「カミ」とはまるで別だと云ふものが多い。さうして、古典所伝の「零神」を忘れようとする。

未来324頁より

緯対 — 神界^{カミヨ} (空間) } 神代
経対 — 神代^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字。

大切なのは、「カミヨ」というコトワマ。(無宇宙)

「神代^{カミヨ}の神^{カミ}」は、「無宇宙の零^{ヒノカミ}の神」の意味。

同頁、3行目。

意味 (人間が無宇宙のヒノカミと同じ
境地に立ったら、その時には、)

「各自各自が^ヒ◎と成り立つ時へ」

以下は、その境地を表現した文。

秘稿「祖神と主神」に即して言とは、

^{ヒノカミ}◎としての、神代五代の境地である。

→ 途中は文学的表現で、

実際の述語は、末尾の「^{カミ}十で、(其に)一^ヒである」である。

(2020.10.20. 追記)